

---

# 勇者がもう一人

ヘリコプター卑弥呼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者がもう一人

### 【コード】

N0990Z

### 【作者名】

ヘリコプター卑弥呼

### 【あらすじ】

天空の血を引く勇者テンと仲間達は、ハルケギニアに使い魔召喚されてしまい……

## 第一話 異世界の勇者

少年の目には、青空が広がっていた。さっきまで見ていた故郷の空に似て、近くはライトブルー、遠くに行くにに応じて群青寄りになっていく中に、離れ離れの千切れ雲が呑気に浮かんでいる。

今、彼は草の絨毯に背中を預けている。さっきまで、大地を踏みしめて歩いてきた筈だ。何故だろう。

上体を起こして起き上がると、見たことのない長身の女性。赤い髪に褐色の肌は初めて見るが、かなりの美人である。その美女の方も目を丸くして彼を見ている。

「お姉さん、誰？」

変声期を迎える前の男の子の高い声。女性と比べると頭一つは小さい子供だから、当然ではある。

「私？ 私はキュルケって言うのよ。坊やは何てお名前？」

キュルケは今、人生で初めて精一杯の努力をしている。冷静であること。

才色兼備で裕福な家庭に生まれ育った彼女は、生まれてこの方あぐせくした記憶が無い。何でも持っていて、数多の使用人にかしづかれるのが当たり前の環境にある彼女は、それに相応しく自信家で、基本的に余裕の笑みを絶やさない。

しかし、使い魔を召喚した筈が、人間の少年が出現した時には言葉も浮かばなかった。ただ、不意討ちのような驚きだけで、現状に

対する理解や認識が全く追い付かなかった。魔物が来る筈のところ  
に、人間が来たなんて未曾有の事態には。

「僕はね、テンっていうんだ」

背中の草をぱっぱと払いながら、テンは思いのまま矢継ぎ早に  
話す。

「さつき皆でお城に帰って来た筈なのに、何かおかしいねー。あれ  
がお城かな？ でも形違うよね」

どこか神秘的な意匠や装飾が凝らされた白銀色の鎧や盾に身を纏  
った少年は、キュルケの背後を指さした。そちらは、彼女達が魔法  
を学ぶトリステイン学院の方角だ。

「お城じゃないわ。トリステイン魔法学院よ。聞いたことない？」

首をブンブン往復させる少年の、癖っ毛どころでないツンツンの  
金髪は、春風と陽射しにコーティングされて艶々と揺れた。

「ないよ。今、世界のどの辺にいるんだろ？ それに皆はどこにい  
るのかな？」

忙しく360度を見回すと、テンは両手で作ったメガホンでどこ  
へともなく声を飛ばした。

「おーい！ テンはこっちにいるよー！ 皆どこへ行ったのー！」

甲高いけど不快でもない少年の声が、草原のいずこともなく響き  
渡って行く。暫くすると、三方からかなりの速さで駆けてくる者達

が、あつという間に彼を囲んだ。

「テン、貴方もいましたか！ よくぞ無事で！」

「坊っちゃん、よう無事で！ ピエールはんとはぐりんも！」

キュルケにとっては、書物でも見たことのない魔物が三体新たにやって来たが、使い魔召喚の儀式の場ゆえに、寧ろその方が落ち着きを取り戻せた。

振る舞いではない冷静さの半分は回復した彼女が、何か聞こうとしたその時、魔物達がやって来た三方から、二人の男子生徒と一人の女子生徒が飛来するのが見えた。

「なるほど。つまり、我々はトリスタニアという異世界に、貴方達の“使い魔召喚の儀式”とやらによって呼び込まれてしまった、と」

キュルケ他三人の青年達がほぼ同時に首を縦に振る。

「そして貴方達は、魔物討伐の帰途、城の手前まで来たところだった、ということね」

今度はテンと三体の魔物が頷いた。

召喚者四名と被召喚者四名は、草原の他の者達から離れた場所で固まって話し合いをしている。今は魔法の授業中であり、トリステイン魔法学院の生徒は、キュルケ達以外にも何百人という。

人間を召喚してしまったキュルケと、その人間の仲間である魔物を召喚してしまった男女三名は、それら魔物が言うことを聞いてくれないこともあり、こうやって一同で話し合いをすることにしたの

だ。

「我々の他に四名の仲間が共に旅をしていました。テンの父君にして、我々魔物の主でもあるアベルと、三体の魔物です。私達だけが召喚されたのか、彼等も同じく召喚されたのか、とても気懸りです」  
「もし召喚されてても、お父さんならルーラで帰れるかも知れないね」

ピエールが語る脇で、テンも考えを添えた。

丁寧な口調で話す鎧騎士ピエール。一つ変わった所は、黄緑色の玉ねぎみみたいな魔物の上に、馬代わりに乗っかっていることだ。キルケ達にとっては、実に珍しい乗り物だった。

「旦那はんはそうでも、わしらはルーラ使えへんからのう。困ったこっちゃで」

随分と訛った言葉を話すのはドロン。水滴を上下逆にしたような体型で宙に浮く山吹色の魔物で、紫色のトンがり帽子に口端からはみ出した小さな牙、そして中年のような口調が、フルフェイスの兜で表情の見えないピエールとは対照的な愛嬌がある。

「そつちの、僕が召喚した液状の魔物は？」

少し癖っ毛のブロンド髪で、端整かつ瘦身の青年が、もう一匹の魔物を指さした。

鈍色の水たまりが盛り上がり、円らな目と半開きのような口が付いているようなその魔物は、先程から仲間達に対してキュツキュツと鳴砂のような声を何度か立てているが、基本的には大人しく見えた。

「彼の名は、はぐりん。大人しいが、我々の中では一番の実力者だ」  
ほう、と感心の声を漏らす青年は、薔薇の一枝で口元を隠した。  
その気障な仕草に、敢えて突っ込む者はいない様子。

「流石は僕。名門グラモン家の御曹司たるこのギーシュに相応しい  
使い魔だよ」

うっとり自分に酔うギーシュ。しかし、長い金髪の少女が今度  
は突っ込みを入れる。

「何言ってるのよ。貴方はまだ駆け出しのドット・メイジじゃない。  
そついう台詞は、相応の実力を備えた人が言うものよ」

家柄はともかく、本人は駆けだしのペーパーに過ぎないことを、  
魔物達の前でも明らかにされたギーシュは、ばつが悪そうにゴホゴ  
ホ咳き込んだ。

「そつ言う貴女はどうなのですか、モンモランシー殿？」

ピエールの冷静な声を受けると、すらっとした体躯の少女は、気  
品のある顔立ちに憂いの陰を落とした。

「私も……同じくドットメイジだけど」

ギーシュに突っ込んだ勢いが失せて俯くモンモランシーの隣で、  
ギーシュとは対照的なぽっちゃり体型の男子の肩を、ドロロンがポン  
ポンと馴れ馴れしく叩く。

「で、おデブちゃんはどつなん？ この子等と同じ、ドットメイジ

とかいう駆け出しけ？」

「おデブちゃんじゃないやい！ 僕にはマリコル又って名前があるんだから」

「悪かった悪かった。おいちゃんの飴ちゃん分けたるから、怒りなさんなつて」

「要らないよ！」

どこから取り出したドローンの飴に、ぶんすかして見向きもしないマリコル又は、ドローンの最初の質問に答えなかった。

「その三人は全員ドットメイジ。やっとよちよち歩きを始めたようなものよ」

“その三人”の視線が、三本の矢となつてキュルケに突き刺さる。しかし、当の本人はそれを意にも介さず続ける。

「事実でしょう。貴方達だけじゃないけど、この学院の大半はヒヨコちゃんみたいなものじゃないの。ま、私は例外的なトライアングル・メイジだけどねー」

ほっほっほつと手を口元に当てて得意気に笑うキュルケに、“その三人”は肩を震わせて悔しがる。妖艶な色気を持つ美女が自慢気に笑う様に、テンはある人物を思い起こした。

「ねえ、ピエール。あのキュルケってお姉ちゃん、デボラさんに似てるね」

「私も同じことを考えていましたよ。はぐりんも同感だよ」

テン達の知り合いに、大富豪の娘で容姿も言動も派手な美女がいた。自信家でプライドの高い、その人デボラは、アベルやテンや彼

の双子の妹のことを、『小魚みたいな顔ね』とのたまうのだが、デボラの妹によれば彼女流の褒め言葉なのだという。

ちなみに、アベルは行く先々で女性の視線を釘付けにする程の美男子であり、テンと妹も誰からも可愛いと言われる美童である。

「ふん、確かに私達はドットで、貴女は格上のトライアングルだけど、結局使い魔の契約が出来ないって意味では同じじゃない」

モンモランシーが立て直して嘲り返す言葉に、キュルケの勝利の高笑いがびたりと止む。

「そうよね。ドットの皆さんが使い魔に軽く見られるのは仕方無くても、トライアングルメイジがそれじゃあ格好付かないどころの話じゃないわよね」

見向きもされずにしれっと受け流されたモンモランシーは、白いハンカチーフを悔しさごとく噛み殺す。もう一言上乘せすれば、ハンカチーフは噛み千切られてしまうのでは、と男子二人は冷や汗かきながら思う。

脇役はほっといてと嘯きながら、キュルケはテンのツンツン髪に指を差し入れて、優しく撫で始めた。

「ねえ、テンちゃん。お姉さんと契約してくれないかしら？ お姉さんの実家、お金持ちだから、貴方のお父さんや仲間を探すのにも協力出来ると思うわ」

優しい気な雰囲気の彼女が紡ぎ出した言葉は、テンの心を掴むのに十分過ぎるインパクトがあった。

「本当？」

「本当よ。嘘は付かないわ」

ぱつと光が漏れるような、子供の無邪気な表情に、キュルケは駆け引き抜きでも可愛がつてあげたい気分になる。しかし、そうは卸させてくれない問屋がいた。

「なりません！ キュルケ殿！ その子を使い魔扱いなどは度し難いことですぞ！」

先程まで、隙を見せない雰囲気ですべて話していたピエールが、突如声を荒げた。

「テンは、魔王を破り世界に平和をもたらす選ばれし者。『伝説の勇者』なのです！ 我々の世界を救う唯一無二の存在なのですよ！」

キュルケ達は、まず驚き、そして啞然とした。ピエールの声の迫力、そしてそれ以上に話の内容の重みに。

「この子の務めは勇者であり、断じて使い魔でなどない。そのような不埒なことは、永久に考えの中から追放し切っていたらどうでなければ、テンには金輪際近付けさせません」

静かな口調に戻ってはいたが、ピエールの言葉自体がとても強かった。さしものキュルケも困惑して苦笑も出来なかった。

「ピエール、もういいよ」

「いいのよ、テンちゃん。貴方がそんなに特別な人だとは知らなかったの。ごめんなさい」

作り笑いも優美なキュルケを、テンは済まなさそうに見上げた。

その髪をもう一度撫でると、キュルケはようやくと三人の同級生の方を振り向いた。

「という訳で、私も貴方達も進級出来なさそうだから、これはもう退学するしかないわね」

吹っ切れた様子で陽気でさえあるキュルケと比べ、他の三人の表情は凍り付いていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0990z/>

---

勇者がもう一人

2011年12月3日20時59分発行